

「こうして」の意味と用法：談話を終結させる機能に着目して

著者	俵山 雄司
雑誌名	日本語教育論集
巻	22
ページ	49-57
発行年	2006-03
URL	http://doi.org/10.15084/00001872

研究ノート

「こうして」の意味と用法

ー談話を終結させる機能に着目してー

The meaning and the usage of *koushite*

俵山 雄司

TAWARAYAMA, Yuji

要旨

「こうして」には、後続する動詞の様態を修飾する文成分の場合と、接続詞相当の語になった場合とがある。本稿は、接続詞的な「こうして」を、談話をまとめ、終結させる機能を持つ表現と捉え、意味・用法の記述を行い、接続詞的な「こうして」は、プロセスを含む出来事から結果を導く「要因－結果」タイプと、プロセスを含む出来事の結果に対する解釈を提示する「結果－解釈」タイプの2種があることを明らかにした。さらに、①出来事のみならず、それに関する注釈等も併せて統合する、②緊張・意外性がもたらされる可能性を排除し、談話が収束に向かっていることを暗示するという、「まとめ」「終結」に適した特徴があることを指摘した。

キーワード：まとめ 終結 プロセス 結果 解釈

1. はじめに

中上級段階の日本語学習者に求められることの1つに、長く複雑な内容の談話をスムーズに展開できるということがある¹。しかし、文法的に正確な文を集積しただけでは、必ずしも読み手が理解しやすい談話とはならない。以下の例(1)は、このことを端的に表している。なお、丸括弧の部分は文法・文体に関する誤用を筆者が訂正したものである。

- (1) ハルビン氷祭りは1963年に始まった。当時中国は三年の(→三年連続で)自然災害にあり(→あい)、住民の生活が(→は)まずしかった。住民の生活を豊かにするために、ハルビン市の書記の提唱の元(→下)で人々は簡単な道具を使って千あまりの氷塊を作って公園にかざった。文革によって12年間中止されたけど(→が)また1978年から氷まつりが(→は)活力を与えられた。

毎年氷まつりで氷像作りのコンクールが行われる。全世界からの芸術家たちが集まって腕を振る。ハルビン氷まつりが(→は)だんだん国際化になっていく(→国際化してきている)。 (上級中国人学習者による作文の後半部)

この作文には文意を誤解するような文法の誤りはないし、構成も理にかなっている。しかし、最後まで読み進めても、何か言い足りないような消化不良の感じを受けてしまう。

この学習者にはどのような技術が欠けているのか。それは、ある同一の話題のもとに行

われた叙述をまとめ、終結させる技術である。ここで最終文（二重下線部）の文頭に「こうして」という表現を加えてみると、前にある叙述がまとめられ、終結に向かって収束していることが感じられるようになる。

このように「こうして」は、談話をまとめ、終結させる技術を支える有効な手段であるが、教科書などで教授項目として扱われることは決して多くない。また、教師用参考書の記述を見ても、「前の文や段落で述べたことの結果を表す。『このようにした結果』という意味」（横林・下村，1988）といった説明があるのみで、これをもって学習者が（1）のような環境で「こうして」を使用できるようになるとは言いがたい²。

本稿では、この接続詞的な「こうして」を取り上げ、意味・用法の記述を行う。この際、様態修飾の「こうして」との連続性についても触れる。その上で、類似の接続表現「その結果」と対比しながら、接続詞的な「こうして」のいかなる特徴が、談話をまとめ、終結させることに貢献しているのかについて考察する。

2. 先行研究

甲田（2001）は、「こうして」の意味・用法に関して、「2～3文など、ある程度のスパンの中で、一連の出来事の過程の帰着をあらわすものである」と述べている。その上で、甲田（2001）は「こうして」の持つ「前件を受けた帰着・決着に重点がある」という特徴は「その結果」と共通しているとしている³。甲田（2001）は両者の置き換えの可能性については特に言及していないが、実際に試してみると「こうして」には（2）のように「その結果」と置き換えられるものが少なくない。しかし、一方で（3）のように「その結果」とは置き換えにくい「こうして」も存在している。

（2） アフリカでは、イギリスが、エジプトから南アフリカまで勢力をのばすと、フランス、ドイツ、イタリアなども争って侵略に乗り出した。（こうして／その結果）、広いアフリカはほとんどヨーロッパの列国に分割されてしまった。（歴史）

（3） シュルツ長官は「合意が近い」との期待を表明し、「双方が努力すれば、首脳会談も可能だ」とシュワルツ外相も述べている。（こうして／?? その結果）米ソ歩みよりの道筋ははっきりしてきた。（甲田，2001：168 一部改）

このことから、接続詞的な「こうして」には、「その結果」と等しいはたらきを持つものと、そうでないもののが存在することがわかる。次節では、実例をデータとして、接続詞的な「こうして」に、どのような意味・用法があるのかを探っていく。

3. 「こうして」の意味・用法

「こうして」には、ここまで述べたような接続詞的なものの他に、後続する動詞の様態を修飾していると捉えられるものがある。両者は、後続する動詞に依存した形で文の中に取り込まれているか否かという点で異なっているが、意味的な連続性も認められる。そこで、

接続詞的な「こうして」の意味・用法について考える前に、様態修飾の「こうして」の用法について述べておく。

3. 1 様態修飾の「こうして」の意味・用法

様態修飾の「こうして」と接続詞的な「こうして」の最も大きな違いは動詞連用形「し」の動作性の強弱である。そして、「し」の動作性が最も強い典型的な様態修飾の「こうして」と、「し」の動作性が最も弱い接続詞的な「こうして」を両極として、両者の間には中間的なものが存在している。「し」の動作性が最も強く、加えてそれぞれの要素の意味がはっきりしているものは動作が行われる様態を修飾する「こうして」である。

- (4) ソースストックは、ものによって違うが、長いものでは材料を1日に3時間ずつ10日も煮込むといったことを行うことがある。少ないものでも6～8時間は煮ないと、よいソースストックはとれない。こうしてとったソースのベースをもとにしてソースは作られる。(たべもの)

- (5) 日本の家の寿命はざっと30年。その解体後に木質ボードに再生、家具や食器棚にして30年利用する。その後もう一度木質ボードにして30年利用する。こうして3回、300%利用すれば木材繊維も疲労し、その後に製品として再利用するのは難しい。(朝日 2005 / 5 / 21 朝刊)

ここで「こうして」は動作の様態、具体的に言うと、(4)は「(ソースのベースを)とる」方法、(5)では「(木材を)利用する」方法を表す成分となっている⁴。

動詞「し」の動作性が弱まってくると、動作の様態というより作用の様態を表すと言った方がいいものになる。たとえば、以下の(6)(7)は、(4)(5)に比べ動詞「し」の動作性は薄れており、「こうして」は「～する」的な動作の方法から「～なる」的な作用の有り様を表すものとなっている。

- (6) 血中アルコール濃度は、飲酒後60分から90分でピークに達し、肝臓で分解されて、まずアセトアルデヒドになる。アセトアルデヒドは酸化されて酢酸となり、ついには炭酸ガスと水とに分解されるが、アルコールがこうして完全に分解排泄されるには、かなりな時間を必要とする。(酒飲み)

- (7) ガン・ウイルスによってガン遺伝子が運び込まれると、正常細胞のガン化が起こることが知られている。ガン・ウイルスであるレトロウイルスは、宿主の遺伝子の中に入り込んでしまう。こうして宿主の遺伝子に組み込まれたガン・ウイルスは、ファージの場合と同じように、「プロウイルス」と呼ばれる。(進化)

とはいえ、これら様態修飾の「こうして」は、接続詞的なものに比べれば動詞「し」の動作性は強い。また、接続詞的な「こうして」の出現位置は文頭で述語動詞から遠いのに対し、様態修飾の「こうして」の出現位置は比較的それが修飾する述語動詞に近いという特徴がある。

3. 2 接続詞的な「こうして」の意味・用法

一方、接続詞的な「こうして」は、動詞「し」のもともとの動作的な性質が失われており、動作・作用の様態を表しているとの解釈はできなくなっている。それに加えて指示語「こう」の指示対象も様態修飾の「こうして」の場合と比べ特定しづらい。

この接続詞的な「こうして」には、「要因－結果」関係を表すタイプと、「結果－解釈」関係を表すタイプの2種類がある。以下、順に例を示しながら解説を加えていく。

3. 2. 1 「要因－結果」関係を表す「こうして」

まず、「要因－結果」関係を表す「こうして」について説明する。このタイプの「こうして」では、先行文脈に、時系列に沿って並べられる複数の出来事が叙述されており、これらの出来事が要因となってもたらされた結果が「こうして」の後で述べられる。接続表現「その結果」との置き換えが可能になるのはこのタイプである⁵。ただ、「こうして」を使用した場合は、先行文脈の出来事間のプロセス全てをそこまでの経緯として統合して受けているという読みが強くなるのに対し、「その結果」に置き換えた場合、時系列の最後尾に位置する出来事のみを受けているという読みが優勢になるという若干の違いがある。

- (8) 五大老の下でその執行部をなしていたのは五奉行であるが、その筆頭が石田三成だ。彼は宇喜多秀家(1573～1655)をいただき、家康に反対する会津の上杉景勝や常陸の佐竹義宣(1570～1633)らと同盟して、家康が会津征伐のため東に下った機会に、兵をあげた。(こうして／その結果)慶長5年(1600)、天下分け目の戦いといわれた関ヶ原合戦となる。(近世)

- (9) 新潟県で十日町市と合併した旧松之山町では、毎年、自宅に住む65歳以上の人に心の健康度のアンケートをしている。心配な結果が出れば、保健師が会って話を聴く。さらに精神科医が自宅を訪問して診察する。(こうして／その結果)10年で自殺率は4分の1に下がった。(朝日2005／6／11朝刊)

先行文で表される出来事は(8)のように1回性の出来事の場合もあるし、(9)のように、連続して繰り返し起こる出来事の場合もあるが、「こうして」によって統合される出来事が、時系列上に並べることができるという点は共通している。

3. 2. 2 「結果－解釈」関係を表す「こうして」

次に、「結果－解釈」関係を表す「こうして」について説明する。このタイプの「こうして」でも、先行文脈の出来事は、時系列に沿って並べられるものである。両者の違いは、「要因－結果」タイプが先行文脈で述べられている出来事を要因とする結果を導出するのに対し、「結果－解釈」タイプは、先行文に含まれる一連の出来事の最終的な結果への解釈(総括的な言い換え)を提示するという点である。このタイプの「こうして」は、結果を導くものではないため「その結果」で置き換えることはできない。

(10) 地球に酸素が少ないときには、酸素のいらない嫌気性バクテリアの天下であった。

やがて、らん藻が誕生して、大気中に酸素を放出しはじめると、嫌気性バクテリアは次第に生活しにくくなっていく。そうしたときに、突然、嫌気性バクテリアの細胞の中に、好気性バクテリアが取り込まれ、共生がはじまる。共生した嫌気性バクテリアと好気性バクテリアは、お互いに利用しあうことによって、より大きなエネルギーを獲得するようになる。その結果、相互の依存性が高くなり、やがて嫌気性バクテリアに取り込まれた好気性バクテリアは、ミトコンドリアになる。(こうして／＊その結果) アメーバに似た新しい生物が地球上に誕生する。(進化)

(11) 天空からやってくるX線は、大気層に拒まれて地表にまでは届かない。そこで1962年にアメリカのブルーノ・ロッシは民間会社の協力を得て、X線観測装置を積んだロケットを打ち上げた。(こうして／＊その結果) X線天文学が誕生した。

(化学)

(10) では、波線部で、ミトコンドリアが発生するまでに経た様々な行程が提示されており、それを受けた「こうして」の後続文は「ミトコンドリア＝生物」と捉え直した上での解釈を提示している。また、(11) は、まず背景として「天空からやってくるX線は、大気層に拒まれて地表にまでは届かない」という事柄があり、それが動機となって「1962年にアメリカのブルーノ・ロッシは民間会社の協力を得て、X線観測装置を積んだロケットを打ち上げた」という出来事に至る。「こうして」の後続文は、この一連のプロセスの結果を、科学史上のエポックとして解釈したものとなっている。

この「結果－解釈」関係を表す「こうして」は、先行文脈中の一定のプロセスを見出せる出来事を統合し、その最終的な結果に対する解釈を、先行文脈とは異なる視点・レベルで提示するものである。

4. 談話をまとめる／終結させることを支える「こうして」の特徴

冒頭で接続詞的な「こうして」が談話をまとめ、終結させる技術を支える表現であると述べた。「要因－結果」関係を表す「こうして」の導く「結果」の意味が、そういったニュアンスをもたらししていると考えられることも可能であろう。しかし、「こうして」は、同様に「結果」の意味を表す「その結果」以上に談話がまとめられ、終結に向かっていることを読み手に感じさせる特徴を持っている。

まず、第一の特徴は、「こうして」が、結果の直接の要因や解釈の直接の対象だけでなく、出来事の背景、注釈、関連事項の説明なども、併せて包み込んでしまうということである。この特徴は、「こうして」が先行文脈を統合して受けること、つまり「まとめる」ことに関与している。以下の例では、先行文脈の時系列に沿って並べられる複数の出来事(波線部)とそれを受ける「こうして」の間に、関連事項の説明や注釈(二重下線部)が挿入されている。

(12) 「ノミネーション」とかいて、とかくサラリーマンには、接待酒、つき合い酒がつきものである。やるせなさそうな真顔を、途端に愛想笑いに切替えるCMで売出したタレントもいるが、殺して飲む酒のホロ苦さが、宮仕えの身にいたく身にしみるからであろう。秒きざみでピリピリ神経をはりつめているテレビ関係者も、勢い番組が終ると夜の街にくだすことになりがちだが、公演の打上げに、役者一同が乱痴気騒ぎをするのと同じ心理であろう。(こうして／?? その結果)芸能人やマスコミ関係者に、お酒の強い人が多くなるのだが、(以下略) (酒飲み)

(13) 政府は、日本を統一した国家とするために、まず1869年、これまで藩主が治めていた土地(版図)と人民(戸籍)とを朝廷に返させた(版籍奉還)。しかし、もとの藩主にそのまま土地と人民とを治めさせたので、実態はあまり変わらなかった。そこで1871年、藩を廃止し、府と県とを置いて、もとの藩主にかえて、中央から新たに府知事・県令(県知事)を任命した。これを廃藩置県とよんでいる。こうして、天皇を上にいただく中央政府が、全国の土地と人民を直接に治める中央集権国家の基礎ができた。

(歴史)

(12)は「要因－結果」タイプ、(13)は「結果－解釈」タイプの例である。これまで提示した例では「こうして」の直前には、「こうして」が導く結果をもたらす要因や、「こうして」によって提示される解釈の対象が存在していた。それに対し、(12)(13)はそれらに関する事柄がコメントとして挿入されている。(12)では「秒きざみでピリピリ神経をはりつめているテレビ関係者も、勢い番組が終ると夜の街にくだす」ことに関連して、「公演の打上げに、役者一同が乱痴気騒ぎをする」という類似の事柄が挙げられている。また、(13)では「藩を廃止し、府と県とを置いた」ことへの名付けとして「これを廃藩置県と呼んでいる」という1文が挿入されている。ここで注目したいのは、通常「その結果」と置き換えが可能な(12)でも、「その結果」を用いた場合は、前件と後件の間に挿入されたコメントによって、結束性が阻害され不自然な文連続になってしまうことである。

このように「こうして」は先行文脈にある要因や結果以外にそれに対する注釈や関連事項も併せて後件と関連付けてしまう。つまり、「こうして」は「その結果」よりも、広い範囲で、様々な性質の出来事・事柄と繋がりを作ることができるのである。このことによって、「こうして」は談話をまとめているという印象を読み手に与えていると考えられる。

また、「こうして」は、談話のまとめだけでなく、終結にも貢献する特徴を持っている。そのことを間接的に示す証拠となるのが、「こうして」が導く結果は、文脈に緊張や意外性をもたらすものであってはならないという制約である。

(14) 米カリフォルニア大学パークリー校の故アラン・ウィルソン教授らは、現代人147人の血液から、細胞の中の小器官ミトコンドリアのDNAを取り出し、お互いの違いを調べて「系図」を描いた。(その結果／?? こうして)、驚いたことに、この人たちの起源が、14万129万年前にいたアフリカ生まれの一人の女性に帰着することが

わかった。

(朝日 1998 / 11 / 20 夕刊)

この例では、先行文脈で調査手順がステップにわけて記述されて、「その結果」の後に、調査結果が述べられている。先行文脈の出来事間にプロセスを読み取ることが可能なため、「こうして」の使用も可能になると推測されるが、実際は相当不自然になる。しかし、後続文中の「驚いたことに」を取り去った(15)では、「こうして」の使用も可能となる。

- (15) 米カリフォルニア大学バークリー校の故アラン・ウィルソン教授らは、現代人 147 人の血液から、細胞の中の小器官ミトコンドリアの DNA を取り出し、お互いの違いを調べて「系図」を描いた。(その結果／こうして)、この人たちの起源が、14 万 129 万年前にいたアフリカ生まれの一人の女性に帰着することがわかった。

以上のことから、「こうして」の導く結果と「驚くべきことに」で表現されるような緊張や意外性はなじまないという結論が導き出される。このことは、「こうして」が、緊張や意外性がもたらされる可能性を排除し、談話がスムーズに終結に向けて収束していることを暗示する標識となっていることを示唆する。

5. おわりに

本稿では「こうして」が、日本語学習者にとって談話をまとめ、終結させる技術を支える有効な手段となりうるという立場から、「こうして」の意味・用法の記述を行った。

ここで得られた知見は、「書くこと」の指導、とりわけ物事の経緯、手順、過程を説明する談話をスムーズに終結に導くことを教える上で有効な手段となる。具体的には、短文レベルでは正確で、複雑な内容も表現できるのに、作文を書かせてみると締まりのない談話になってしまう学習者を手当てする際の 1 つの方法として採用することができるだろう。

本稿で扱った「こうして」は、直前の文脈が一定のプロセスを持つ出来事・事柄で、後続文が結果や解釈という環境で用いられるものであった。他の環境では、談話をまとめ、終結させるために、別個の技術や表現が用いられていることは想像にかたくない。これらの表現の体系的な指導のため、同類の表現についてのさらなる研究が期待される。

注

- 1 本稿では「談話」という概念を「何らかのまとまりのある意味を伝える言語行動の断片」(メイナード, 1997:13)と捉えている。つまり、1 篇の文章だけでなく、それを構成する部分となっている、ある同一の話題のもとに行われた叙述のようなものも、それ自体で 1 個の「談話」とみなす立場を取るものである。
- 2 横林・下村(1988)以外には、「前文に述べた事柄を『こう』で指示して、“このように…して、その結果”の意を表す」(森田, 1989)、「細かい経緯を述べた後、結末を示すときに使う」(庵・高梨・中西・山田, 2001)などの記述がある。
- 3 甲田(2001)以外にも、形態的な類似性をもとに、「そうして」との比較を行った馬

場（1993）があるが、本稿では意味的な類似性を扱うため、特に触れない。なお、接続詞的な「こうして」の用法について馬場（1993）は「先行文群の内容を要約的にまとめ、結果的狀態を導く」としている。

- 4 「こうして」は接続助詞「て」を含み持つため、原理的には「付帯状況」「継起」「原因・理由」「並列」など接続助詞「て」の持つ他の意味で用いられる可能性がある。しかし、今回調べた範囲では、接続詞的なものを除けば、動作の様態修飾以外の例は見つからなかった。金水・木村・田窪（1989）が現場指示の「こうして」の例として挙げているものも、同じく動作の様態修飾だということを考えると、「こうして」という表現が、動作の様態修飾以外の意味では具現化しにくい理由があるのかもしれない。
- 5 張（2003）は「その結果」の機能を「原因とその結果を繋ぐ」ものと「きっかけとその結果を繋ぐ」ものとに分類し、前者は必然的因果関係を含むのに対し、後者は複数ある可能性のうちの1つの生起でしかないとしている。本稿の「要因—結果」関係は、両者を含むものである。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 金水敏・木村英樹・田窪行則（1989）『日本語文法セルフマスターシリーズ4 指示詞』くろしお出版。
- 甲田直美（2001）『談話・テキスト展開のメカニズム』風間書房。
- 張麟声（2003）「論説文体の日本語における因果関係を表す接続詞型表現をめぐって—『その結果』『そのため』と『したがって』—」『日本語教育』117, 日本語教育学会。
- 仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」仁田編『複文の研究（上）』くろしお出版。
- 馬場俊臣（1993）「指示語系接続語と指示語—『そうして、こうして』を例として—」『語学文学』31, 北海道教育大学語学文学会。
- メイナード・K・泉子（1997）『談話分析の可能性 理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版。
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店。
- 横林宙世・下村彰子（1988）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ6 接続の表現』荒竹出版。

用例出典

- （たべもの）河野友美（1974）『たべものと日本人』講談社／（近世）高尾一彦（1976）『近世の日本』講談社／（酒飲み）中村希明（1990）『酒飲みの心理学』講談社／（進化）中原秀臣・佐川峻（1991）『進化論が変わる』講談社／（化学）米山正信（1991）『化学と

んち問答』講談社／（歴史）川田侃・尾藤正英・田邊裕ほか 33 名（1993）『新しい社会
歴史』東京書籍 以上、『CASTEL／J CD-ROM V1.3』（日本語教育システム研究会）より
（朝日）朝日新聞（Digital News Archives in Library を利用）